

# 現代フランス語複合過去形の 「曖昧性 (ambiguïté)」について

古 石 篤 子

## は じ め に

英語の現在完了形と、フランス語の複合過去形（以下、PC と略す＜passé composé＞）とが同価値ではないということは周知のことであり、次の例にその一端をうかがうことができる。

- (1) a. The letter has arrived now.  
b. \*The letter has arrived yesterday<sup>1)</sup>.
- (2) a. La lettre est arrivée maintenant.  
b. La lettre est arrivée hier.

英語の現在完了形は、発話時点を指向する副詞（例えば、now）以外とは共起が不可能なのに対して、フランス語の PC の場合には、例 (2b) が示すように、そのようなことがない。つまり “hier”（きのう）というような、発話時点以前の期間・時点を明確に指向する副詞とも共起し得るのである。

ということは逆に言えば、

- (3) La lettre est arrivée.

という発話は、「手紙が着いている（今そこにある）」のような「結果の状態 (état résultant)」の価値をもつものか、あるいは「(いついつ) 手紙が着いた」というように単に「過去の出来事 (événement-dans-le-passé)」の価値をもつものか、それ自体は曖昧 (ambigu) だということである。つまり、このような発話を前にした聞き手は、状況あるいは文脈抜きにしては、どちらの価値が実現されているのか解釈に困ることになる。

また、PC には次のような用法もある。

- (4) J'ai gardé un très bon souvenir de toi.

1) \*印は、統辞的・意味的に受け入れがたい文を示す。

君のとても良い思い出が残っています。

- (5) J'ai bientôt fini.

(Sartre cité in Imbs, 1960, p. 103)

もうすぐ終わります。

- (6) Un malheur est vite arrivé.

(Imbs, *Ibid.*, p. 101)

不幸が起こるのは速い。

すなわち、(4)は「結果の状態」とも「過去の出来事」ともいずれとも言えないし、(5)は明らかに未来の状況に言及しており、(6)は格言的表現（超時的表現）である。つまり(4)、(5)、(6)の PC は、(2a)、(2b)のいずれのそれとも異なる価値をもっていることが分かる。

これまで現代フランス語の時称体系の中で、PC を完全に現在時 (temps du présent) の中に組み込んでいた G. Guillaume (1970 [1929]) と、それとは逆に過去時 (temps du passé) としか見なしていなかった A. Meillet<sup>2)</sup> のような極端な立場を別にすれば、多くの言語学者は各自の時称体系の中で PC に、概ね (2a) と (2b) の価値に匹敵する二つの位置を付与してきた。

本稿では、現代フランス語の PC の様々な異なった価値を、その形 (être あるいは avoir の現在形+動詞の過去分詞) にさかのぼって問い直し、(2a)、(2b)をはじめ(4)、(5)、(6)などの諸価値がどのようにして生み出されるのか、そしてそのことに関与するファクターは何かといった問題を考えてみたい。PC は古くから多く

2) 《L'affaiblissement progressif de la valeur du type j'ai fait (parfait) a abouti à en faire un simple prétérit, sans aucun reste de la valeur de parfait.》(A. Meillet, 1982 [1921-36], p. 143) Meillet によれば、フランス語には今のところ完了態 (le parfait) を表す言いかたが無い。(！)

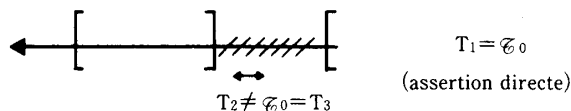
の語学者の興味を引いてきた。したがって研究も多いが、この辺で一度自分なりに問題を考え直してみたいと思ったのである。またフランス語では、単純形／複合形の対立が総ての法（直説法、接続法、不定法）にわたって存在している。PC の価値が生みだされるメカニズムを明らかにすることは、他の複合形を考えるうえで役にたつであろうことは疑いがない。

本稿では第Ⅰ節で、PC の二つの基本的価値の仮説を立てる。そして第Ⅱ節で、PC の多価値性の「謎」を握っていると思われる PC の形、および事行<sup>3)</sup>のタイプを考察した後、第Ⅲ節で PC の諸価値の生成過程を、二つの基本的価値についての仮説に基づいて明らかにしてゆく。

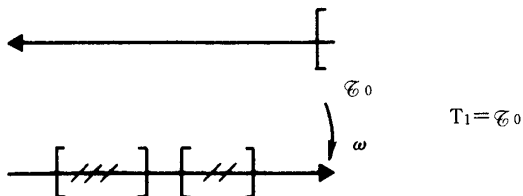
## I PC の二つの基本的価値

J.-P. Desclès は PC に、“parfait du présent” と “aoriste” の二つの価値を認める。彼は “parfait” の概念について、E. Benveniste (1966, p.244) を引きながら次のように言っている。“parfait” は、「過去の出来事と、その想起 (évoquant) の位置する現在との間に生き生きとした絆を設定する。<sup>4)</sup>」(Desclès, 1980 [1978], p.218) それに対し “aoriste” は、事行が「発話の状況から完全に断ち切られていることを示している。<sup>5)</sup>」(Ibid., p.222) フランス語では “aoriste” の価値は、単純過去形によっても表される。Desclès は以上の二つの価値を、次のような図式で表している。

### (7) a. “parfait du présent”



### b. “aoriste”

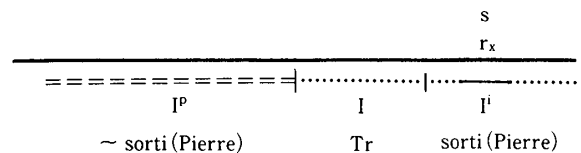


[注] t<sub>0</sub> = moment d'énonciation, T<sub>1</sub> = moment de locution, T<sub>2</sub> = moment du procès, T<sub>3</sub> = point référentiel, ω = signe de “rupture”

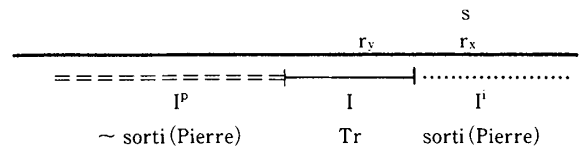
(2a) の PC の価値が前者に匹敵するとすれば、(2b) のそれは後者ということになる。ただし (7b) の図を眺めるとき、我々はサルトルがカミュの「異邦人」——この小説は多くの小説のように単純過去形ではなく、PC で書かれていることで有名である——の文体について書いた次の文章を思い出すのである。「『異邦人』の各文はそれぞれ島である……<sup>6)</sup>」(Situations I, p.142) (2b) の PC が、確かに発話時点から切れて「過去の出来事」を表していることを認めたとしても、果たしてこのような文の連続が、単純過去形のそれのように、(7b) に見る形で互いに緊密に連結し合いつつ、一定の方向を持った「語り」の世界を築きうるかということは疑問である<sup>7)</sup>。

一方 C. Vet (1980, p.87) は、(2a) のように「結果の状態」を表す PC を “PC implicatif” と呼び、(2b) のように「過去の出来事」を表す PC を “PC de l'antériorité” と呼んでいる。それぞれを、彼は次のように図式化している。

### (8) a. “PC implicatif”



### b. “PC de l'antériorité”



3) 本稿では、状態・動作・出来事、……等の総称語として「事行」procès を用いる。

4) La notion de parfait «établit un lien vivant entre l'événement passé et le présent où son évocation trouve place».

5) La valeur d'aoriste indique que le procès est «en rupture complète avec les conditions initiales de l'énonciation».

6) «...une phrase de "L'Etranger" c'est une île...»

7) 現に、口語における「語り」の部分には、PC ではなく現代形が、半過去形と共に用いられることが多い。(Vet, 1981, p.118 ; Culioli, 1980 [1978], p.190, 等参照)

[注] ==== = ce qui est présupposé,

—— = ce qui est affirmé,

…… = ce qui n'est ni affirmé, ni présupposé,

s = moment de la parole,

r<sub>s</sub>, r<sub>y</sub> = points référentiels,

I = intervalle (de la situation),

I<sup>p</sup> = intervalle de la situation présupposée,

I<sup>i</sup> = intervalle de la situation impliquée.

ただしこのシステムでは, Vet は “PC implicatif (「一種の現在時である」と Vet は言う)” を, 彼のいうところの “procès transitionnel”, すなわち 「transition (変化点) を有する事行」 にしか認めていない。procès transitionnel とは, 例えば [jaunir (le papier)] (紙が黄ばむ), [arriver (la lettre)], [manger (il, une pomme)] (彼がりんごを食べる) などのように一種の「到達点=変化点」をその意味の中に含み, その「変化点」を境に, ある状態 (E<sub>1</sub>) から別の状態 (E<sub>2</sub>) への移行を導入する事行であるが, これを Vet は présupposition (前提) と implication (含意) の概念を用いて説明する。すなわち, [jaunir (le papier)] という事行に関していえば, この事行はその「変化点」つまり事行 [jaunir (le p.)] の成立以前には “~jaune (le papier)” (紙は黄色ではない) を前提し, 成立後には “jaune (le p.)” (紙は黄色である) を含意する, というわけである。したがって PC implicatif とは, 事行のその含意の部分が確認されうるような価値を持つ PC のことをいう。

ところで次のような例を見てみよう。

(9) Maintenant, j'ai mangé assez.

(Klum, 1961, p.173 note 1<sup>8)</sup>)

ここで問題になっている [manger (je)] という事行は, それ自体「変化点」を含まないので procès “non-transitionnel” である。にも拘わらず, (9)でも(2a)と同様に, 発話時点における「結果の状態」が問題となっていないのである

8) Klum はこの注で, (9)を次の二文と対比させている。

- J'ai mangé à 9 heures.

- Dès que j'ai mangé, je suis à vous.

うか。然りである。だとすれば, (9)の PC は「一種の現在時」であり, PC の「結果の状態」の価値を procès transitionnel を含む文に限ることは, 定義としては狭すぎるということになる。また, Vet は “véritable parfait (本来の完了形)” は現代フランス語からは, いくつかの慣用句, 例えば

(10) a. Elle a vécu.

彼女は死の床についた。

b. J'ai dit.

以上で発言終わります。

などを除いてほとんど姿を消してしまった。」(Vet, *Ibid.*, p.83) というのであるが, 例(9)に「結果の状態」をみるとするならば, この Vet の言うところを受け入れることはできなくなる。

我々としては, PC について一応次のような大まかな仮説を立てておくことにする。PC は二つの基本的価値を持つ。ひとつは, (2a) に代表されるような「結果の状態」という価値, 他のひとつは (2b) に代表されるような「以前の出来事」という価値である。「過去の出来事」とは, 発話時点を基準にした際の「以前の出来事」といえる。各々の価値を表している PC を, PC à la valeur de parfait (PC<sub>parf</sub>), PC à la valeur d'antériorité (PC<sub>ant</sub>) と呼ぶことにする。勿論 PC というひとつの形が二つの異なった価値を生むのであるから, それにはそれぞれの条件があり, それについては第Ⅲ節で細かく検討する。

## Ⅱ PC の形と事行のタイプ

フランス語の複合形はすべて <être あるいは avoir + 動詞の過去分詞 (以下, p.p. と略す <participe passé>) という形を持つ。PC の形は, <être あるいは avoir の直接法現在形 (以下, PR と略す <présent>) + p.p. > であるが, この時称の「曖昧性」(ambiguïté), 別のことばでいえば, この時称の多価値性の謎は, ひとつは, この PR と p.p. という二つの要素が組み合わさった形自体に, 他のひとつは, この形と様々の事行のぶつかり合いに潜んでいると考えられ

る。

まず、PC のみならず複合形に共通の完了相 (aspect accompli), すなわち、事行がある時点からみて成立済みであることの表現は、その p.p. に起因すると考えられる。G. Guillaume 風に言えば、p.p. は、動詞の持つ「緊張」(tension) をすべて解き放ってしまった後の、動詞の “image morte” (死んだ姿) を提出している (Guillaume, *op. cit.*, p.18) ということになる。これに対して、「緊張」をすべて保持しているのは不定詞で、「緊張」を徐々に解き放ちつつある過程にあるのは現在分詞である。したがって p.p. は、これから起こる可能性を秘めた、あるいは現在起こりつつある事行の姿ではなく、既に起こってしまった事行の姿を提出しているといえる。

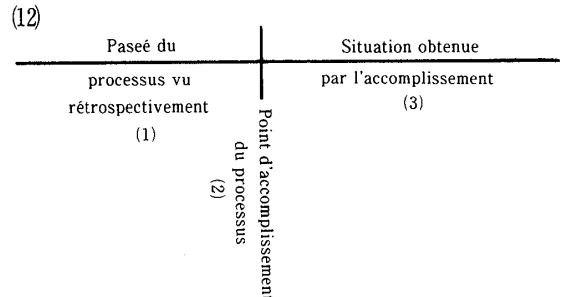
これに対して、être の PR, あるいは avoir の PR は次の二つの役割を持つと考えられる。まずひとつは、p.p. の表す成立済みの事行を、文の主語に関わるものとして、その主語の表すところのものに付与することであり (être, あるいは avoir の役目<sup>9)</sup>), 他のひとつは、その事行の成立時をある基準点に対し位置づけることである。そしてその基準点は多くの場合、発話時点 ( $t_0$ ) に一致する (「PR」の役目)。「多くの場合」と留保をつけざるを得ないのは、そうではない場合もあるからである。それは PR の特性による。つまりこの時称は「未来」( $t_0$ 以降) のことがらについても、また「超時的」なことがらについてもよく使用される。「過去」( $t_0$ 以前) のことがらについても用いられるが、その場合、動詞の語彙にかなり制約がある<sup>10)</sup>。また、「歴史的 PR」[présent historique] は「語り」の構造に入るので少し性質を異にする。) このような PR の特性が PC の価値にも深く反映してくるのは当然である。こういったことについては第Ⅲ節で検討する。

以上のことを(11)について例示すると次のようになる。

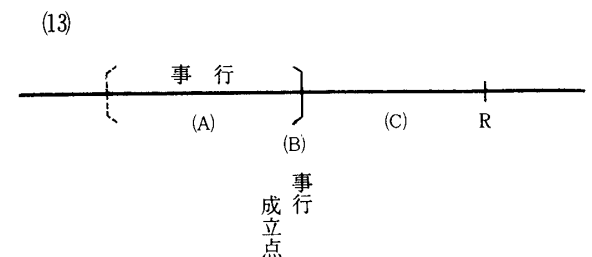
(11) La lettre est arrivée. (= (3))  
[arriver] (到着する) という事行は p.p. で示されているから、既に成立済みの姿で提出されている。一方、この [arrivé] (到着済みである) ということは、(助)動詞 être により一種の属性として主語 la lettre に付与されている。そしてその être が PR であることから、「手紙が着く」という成立済みの事行は多くの場合、発話時点に対して位置づけられることになるのである。

このように、言わば「過ぎ去ってしまったこと」を表す p.p. と、「現在展開中である」ことをあらわす PR との同居が PC の特性を成しており、それが「謎」のひとつの原因となっている。

P. Imbs は “l'accompli” の構造を次のような図式で表している。



この図に、図(7a)を参考にしつつ、基準点 (R) と事行の始点<sup>11)</sup>を加えて、PC のプロトタイプを次のように想定してみることにする。基準点とは事行の成立を確認する時点である<sup>12)</sup>。



9) Benveniste は次のように言っている。

《Être est l'état de l'étant, de celui qui est quelque chose ; avoir est l'état de l'ayant, de celui à qui quelque chose est.》(Benveniste, 1966, I, p.198)

10) 佐藤 (1984) に詳しい分析がある。

11) 始点を加えるのは PC のアスペクトによる。本稿では扱わなかったが、PC は、始点・終点 (明示的にも暗示的にも) のはっきりしている副詞句などと共起が自然である。これは PC の持っているアスペクトによる。一般には aspect “perfectif” といわれる。

12) 青木 (1987), p.24.

PC では多くの場合 R が発話時点（以下  $t_0$  と記す）と一致する。

さて、PC の「謎」を生んでいるもう一方の原因、すなわち事行のタイプの問題に移ろう。事行の種類の相異が我々の注意を引くのは、いろいろな事行がある一定の言語形、例えばここでは PC という形、と出会い、そこに異なった意味が生じるのを見るときである。

例えば次の例を見てみよう。

(14) J. C. : Albert Camus a été  
votre ami.....

M.-P.F. : Oui.....

J. C. : Je dis “a été”, car  
il y a eu rupture.

（インタビュー1971年5月5日、  
*Radioscopie III*, pp.40-41）

この中でインタヴューアー J.C. は、A.Camus が M.-P.F. の友達だったことがある、ということ述べるのに PC を使っていて、おまけにわざわざ自ら「PC を使った」ことを強調している。というのも、そのあと二人の友情が途切れたという事実を示したいからである。ということは、[être (A.C., votre ami)] (A.C. はあなたの友人である) という事行は PC で表された場合、それ自体では(3)のような曖昧性を持たない、つまり「以前の出来事」としての価値しか持たないらしいと考えられる。

ではこの事行を、例えば[arriver (la lettre)]のような事行と比べてみると、どのような特徴が挙げられるであろうか。まず後者が *procès transitionnel* なのに対して、*non-transitionnel* である。それからすぐ目につくことは、後者が *procès “momentané”*<sup>13)</sup>（瞬間的事行）なのに対して、“non-momentané”（非瞬間的）であることである。また、後者の事行は *procès “à terme fixe”*<sup>14)</sup>（終点の定まっている事行）といえるが、[être (A.C., votre ami)] のような事

行は、*procès “sans terme fixe”*<sup>15)</sup>（終点の定まっていない事行）ということができる。*procès à terme fixe* とは、事行の継続が、その事行に内在的に含まれた終点を越えては不可能な事行をさす。例を引こう。ここに [manger (il, une pomme)]（彼がりんごを一個食べる）という事行がある。この場合、事行が「終点」に達したとき、つまり、そのりんごが全部食べられてしまったとき、その同じ事行は続けられることはできない。もちろん [manger (il, une pomme)] という事行を繰り返すことはできるが、それはあくまで繰り返しであって、同種の別の事行である。また別の見方をして、C. Vikner 他<sup>15)</sup>の考えかたを借用すれば、*procès à terme fixe* は、その内的構成が *hétérogène*（不均質）であることを特徴とするし、*procès sans terme fixe* は逆に、その内的構成が *homogène*（均質）であることを特徴とする。「均質である」とは、その事行を構成するどの部分をとっても、それらが同じであるということである。これに対して *procès à terme fixe* の場合は、事行を構成する各部分が一様ではなく、「終点」に向かって順序だてて並んでいると考えられる。*procès transitionnel* と *procès à terme fixe* とは似たような概念であるが、我々はあえてこれらを区別したい。何故なら、前者は必ず *procès à terme fixe* であるが、その逆は必ずしも真ではないからである。つまり *procès à terme fixe* には、「終点」は含んでいても、必ずしもある状態 ( $E_2$ ) への変化を明確に含意しないものもあるからである。例えば、[frapper (il, Jean)]（彼がジャンをたたく）、[éclater de rire (elle)]（彼女が突然大笑いする）などの事行は、明らかに「終点」を含む。しかしその点が変わり目となって、事行の成立以前の  $E_1$  とは異なった何らかの  $E_2$  が含意されているとは考えにくい。つまり *procès à terme fixe* には、*transitionnel* なものと *non-*

13) 厳密に「瞬間的」な事行は存在しない。C. Vikner (1985, p.97) の言うように、「瞬間的な事行」とは、あたかも全く時間をとらないかのように言語が扱う事行のことである。

14) A. Klum (1961) の用語。

15) Vikner (1985), Taylor (1977), Bach (1981)。

transitionnel なものとの双方がありうる。これに比して, *procès sans terme fixe* は必ず non-transitionnel である。以上をまとめて, 異なったタイプの事行に便宜的に番号をふると, 次のようになる。

(15)

- |   |                               |       |
|---|-------------------------------|-------|
| { | <i>procès sans terme fixe</i> | (I)   |
|   | — non-transitionnel           |       |
| { | <i>procès à terme fixe</i>    | (II)  |
|   | non-transitionnel             |       |
|   | transitionnel                 | (III) |

### III PC の諸価値の生成

#### 3.1. PC<sub>ant</sub> について

(2b)に代表されるような「以前の出来事」の価値を持つ PC を PC à la valeur d'antériorité (PC<sub>ant</sub>) と呼ぶ。PC<sub>ant</sub> では, 話者は事行の結果ではなく事行そのもの, つまり図(13)でいえば, (B)において成立した事行の(A)の部分を確認しているといえる。

では, このような価値が生成されるにはどのような条件が必要か考えてみよう。(2a)と(2b)は, “maintenant” と “hier” という副詞表現のみが異なっている。ということは, (2b)の「以前の出来事」の価値生成に “hier” のタイプの表現は関与的であるということである。また次の例も見てみよう。

- (16) a. Impossible d'entrer : le concierge a fermé la porte.

(Dic. GLLF, p.268)

- b. Un jour, le concierge a fermé la porte à neuf heures.

(Ibid., loc.cit.)

双方において [fermer (le concierge, la porte)] (管理人が門を閉める) という事行が問題となっているのだが, (16a) では「結果の状態」, (16b)では「以前の出来事」が表されている。前者では “impossible d'entrer” (入れない!) が, 眼前の閉じられた門 (la porte fermée) の存在を示しており, 後者では “un jour, ... à neuf heures” (ある日, ... 9時に) という, 発

話時点 (t<sub>0</sub>) とは切れたある一時点を示す表現がある。この時間表現それ自体は必ずしも t<sub>0</sub> 「以前」の一時点を指すとはいえないが, 少なくとも t<sub>0</sub> とは「切れた」一時点を指すことは確実に, 事行が既に成立していることを表す PC と共起すると, 「以前」の一時点を指すことになる。

このように(2b), (16b)の例からも分かるように, PC<sub>ant</sub> が生まれるには, t<sub>0</sub> とは切れた t<sub>0</sub> 以前の時点, あるいは期間を表す要素が必要だということになる。「t<sub>0</sub> と切れた」というのは t<sub>0</sub> を指向したり, 含んだりしないという意味である。“hier” は déictique な表現であるが, déictique というそのこと自体は問題にはならない。指向対象が t<sub>0</sub> と切れていればよいのである。) Vet の図(8b)に於ける r<sub>1</sub> は, 恐らくこの要素と同じ機能を果たしていると考えられる。こういった要素は(2b), (16b)のように言語表現でもよいし, あるいはまた前後の文脈・状況でもよい。次の例では, 答えの中には t<sub>0</sub> 以前の点を表す明示的表現は何も無いが, その PC は明らかに PC<sub>ant</sub> の価値を持っている。そのことは二つのことから分かる。

- (17) - Qu'est-ce que tu as fait samedi soir ?

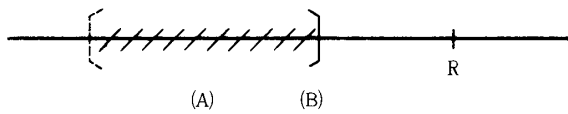
- Je suis sortie avec Marc.

まず, 質問の中ではっきり「土曜の夜」のことが問題になっていること。次に “je suis sortie” がもし PC<sub>parf</sub> の価値を持っているとすれば, この事行は transitionnel なので “je ne suis pas là” と同義ということになり, 状況からそれは不可能である。三人称 “il est sorti” なら, 文脈・状況抜きでは判断に迷うこともあるだろうが, 一, 二人称 “je suis sorti”, “tu es sorti” では, “je”, “tu” という発話状況 (univers d'énonciation = moi-ici-maintenant) に原則的に不可欠な話者と聞き手が話題となっているので, それが「そこに居ない (je ne suis pas là, tu n'es pas là)」という解釈は発話の原則に矛盾することになる。ただし, 留守番電話などに録音されている場合には, “je suis sorti” の PC も PC<sub>parf</sub> の価値を持ちうる。それでもやはり

“en ce moment”（現在）などの、発話状況を指向する表現と共に使用されるのが普通である。（実際にはこのようなメッセージは、泥棒を呼び寄せるようなものなのであまり好まれないようであるが。）

(18)は、図(13)をもとにして(2b), (16b), および(17)の PC<sub>ant</sub> の価値を図示したものである。これらの例に特徴的なのは、基準点(R)が発話時点(t<sub>0</sub>)に一致していることであるが、PC<sub>ant</sub> のプロトタイプとしてはそれは必要条件ではない。

(18)



斜線部分が話者により確認されている部分である。

ではこのような PC<sub>ant</sub> においては、Desclés のように事行は R (=t<sub>0</sub>) から完全に断絶されて提示されているのだろうか。ここで我々は、カミュの「異邦人」の文体に対するサルトルの直感の方を信じたい。それはまた R. Martin (1971, pp.108-109) の言うところとも同じ路線にある。Martin は “PC《prétérit》”（我々の PC<sub>ant</sub> と同じ価値を持ったものと考えられる）について次のように言っている。すなわち、この PC はよく単純過去形の「ライバル」と考えられるが、単純過去形と違っているのは、「心の目が現在の方へ向くことができる」<sup>16)</sup> (Ibid., p.108), 「心の中で過去の出来事を現在時へと結び付けることができる」<sup>17)</sup> (Ibid., p.109) ことである、と。このように PC で表された事行は、それが PC<sub>ant</sub> の価値を持つ場合でも、être あるいは avoir の現在形という「へその緒」で R (=t<sub>0</sub>) とつながっていると考えられる。したがって、各事行が各々 R (=t<sub>0</sub>)

との絆を保っているのであるから、事行間の連結はその分弱くなり、それでサルトルのような感想が生じてくるわけである。

PC<sub>ant</sub> 成立には事行の種類の制約は見られないが、二、三の点について述べておこう。

ひとつは次のような PC に関するものである。

(19) a. Jean a été à Shinjuku hier.

b. Elle a été malade.

c. Je l'ai su par Max.

(19)のそれぞれは、(20)の各文と同義である。

(20) a. Jean est allé à Shinjuku hier.

b. Elle est tombée malade et restée malade pendant un certain temps.

c. Je l'ai appris par Max.

[être à Shinjuku], [être malade], [le savoir] などは、non-momentané であると同時に procès sans terme fixe であり、そのうえ出来事や動作というよりは「状態」を表すといった方がよい事行である。このような場合 t<sub>0</sub> 以前のコンテキストでは、動詞は半過去形におかれることが多い (Martin, Ibid., p.78<sup>18)</sup>)。ところが PC が使用されることにより (B) の事行成立点が強調され、そのことによって (20) のような意味効果が生まれると考えられる。

他のひとつは、transitionnel な事行の中の non-momentané なものに関する。これは (15) で見るとおり procès à terme fixe の下位グループ (Ⅲ) に入る事行である。transitionnel・momentané な事行の場合は、(B) の時点で事行が成立した途端それは「完成」し (achèvement = terme fixe まで到達する), E<sub>2</sub> がそこから始まる。ところが transitionnel・non-momentané の事行に関しては、事行の「成立」は、その事行が「完成」したということを必ずしも意味しない<sup>19)</sup>。[écrire (Alice, sa thèse)] (アリスが学位論文を書く) という事行を例にとって見て

16) 《...à l'encontre du PS, seul le PC laisse à l'esprit, ..., la possibilité d'un regard du côté du présent.》

17) 《Il reste au moins à l'esprit la possibilité, (exclue sans appel par le PS), de rattacher l'action passée au moment actuel.》

18) Martin は次のように言いながら、lexème と morphème の perfectif/imperfectif の関係を統計に基づいて述べている。《...la modalité d'action n'est pas sans incidence sur le choix du temps.》

19) Desclés, 1980, pp.198, 249.

みよう。

- (21) a. Alice a écrit sa thèse.  
b. Alice a écrit sa thèse pendant un an.  
c. Alice a écrit sa thèse en un an.

(21c)ではアリスが論文を仕上げたということは明白であるが、(21b)ではそのようなことは確言できない。というよりむしろ、アリスの論文はまだ終わっていない印象を与える。これらの意味の相違は、procès transitionnel・non-momentanéの事行と、副詞句“pendant un an”, “en un an”との共起から生じてくるのである。これに対して(21a)は、「完成」と「未完成」の双方の解釈が可能である。単独の発話の場合、ふつうは「完成」(＝論文が仕上がった)の解釈が優勢であるが、次のように一連の事行の中に挿入されると「未完成」の解釈も可能となる。

- (22) Hier après-midi, Alice a écrit sa thèse puis elle est sortie et rentrée tard.

「論文」の代わりに「手紙」(une lettre)だと、事行の「完成」の解釈が優位に立つだろう。これは、「昨日の午後」という時間の幅と、一通の手紙を書くのに要する時間との関係と，“une”の存在も関与的であろう。

最後に次のような例を考察してみよう。

- (23) a. La lettre est arrivée hier. (= (2b))  
b. Elle est tombée malade lundi dernier.  
c. Les vacances ont commencé le 21 juillet.

これらの例では，“hier”, “lundi dernier”, “le 21 juillet”という  $t_0$  以前の時点・期間を指向する表現があるために、上で述べた定義に従えば  $PC_{ant}$  が実現されているといえる。しかしこれらの発話を聞いて、成立した事行の結果が発話時点まで続いている (La lettre est là., Elle est malade., On est en vacances.) と考えることができる場合もある。何がそういう解釈を生むかということ、まずもともと事行が明確に transitionnel であり、そのために結果の状態  $E_2$  の姿がはっきりしている。しかしこれだけでは不十分で、その上に、事行の結果の  $t_0$  までの継

続を妨げるような何等かの (言語内的・言語外的) 要素が無く、そのうえ文脈・状況が聞き手にそのような解釈を促すようなものであることが必要である。このように  $PC_{ant}$  を含む発話が、事行の性質や文脈・状況とから聞き手に  $t_0$  における「結果の状態」の解釈を与える現象を、我々は聞き手の「推論」(inférence)の結果に帰する。

さて、以上  $PC_{ant}$  の基準点(R)が発話時点( $t_0$ )に一致 ( $R=t_0$ <sup>20)</sup>)する場合を見てきた。では、Rが  $t_0$  に一致しない場合 ( $R \neq t_0$ ) も考えられるであろうか。  $R \neq t_0$  の場合には  $PC_{parf}$  の事例は多いが、 $PC_{ant}$  の例は極めて少ない。しかし次の例は、この数少ない  $PC_{ant}$  ( $R \neq t_0$ ) の例のひとつである。

- (24) J. C. : On dit que la richesse assèche le cœur...

S. F. : Absolument faux. Le cœur, c'est le cœur. Quand on a eu un cœur à 15 ans, on l'a encore à 70... soyez tranquille.

(Radioscopie I, p.73<sup>21)</sup>)

この例では，“on”が話者も含んだ“人々”と解釈でき、したがって一種の格言的超時的表現といえる。Rの位置は  $t_0$  に対して特定できない。“à 15 ans”という表現は、R ( $\neq t_0$ : ここでは“à 70”。“15歳”も“70歳”もいずれも特定のではなく一般的に語られている。)に対する「以前」の時点を指向している。

また、明らかに  $t_0$  以降にある R ( $t_0 < R$ ) を基準にした  $PC_{ant}$  の事例は今のところみつからない。

### 3.2. $PC_{parf}$ について

(2a)に代表されるような「結果の状態」の価値を持つ PC を PC à la valeur de parfait ( $PC_{parf}$ ) と呼ぶ。 $PC_{parf}$  では、話者は事行そのも

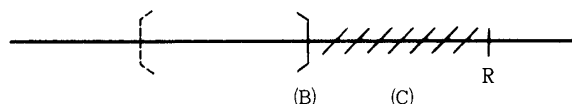
20) 「=」は同時性, 「≠」は非同時性, 「<」は時間的前後性 (前<後) を表す。

21) 藤田知子氏口頭発表 (1987年7月18日) 「Une femme est une femme—X ÊTRE X 型構文について」のハンドアウトより。



のではなく、事行の結果生じた状態、つまり図(13)でいえば、(B)に於いて成立した事行の(C)の部分を確認しているといえる。PC<sub>parf</sub>を図示すると次のようになる。

(25)



斜線部分が話者により確認されている部分である。

また(2a)や(16a)では基準点(R)が発話時点( $t_0$ )に一致していて、 $t_0$ に於ける事行の「結果の状態」が問題となっている。このような価値が生じるためには、3.1.でもPC<sub>ant</sub>と対照して見たように、発話時点を指向する何らかの言語内的・言語外的要素が必要ということになる。例えば(2a)では“maintenant”, (16a)では眼前の閉じられた門の存在を示す“Impossible d'entrer”という表現がそういった役割を果たしている。

また次の例では、質問の中で「今」マックスが居るかどうかの問題となっていることがはっきり分かる。

(26) - Allô ! Est-ce que Max est là ?

- Non, il est sorti.

以下に、PC<sub>parf</sub>成立における事行の側からの制約を見てゆきたい。

まず transitionnel な事行から検討しよう。この種の事行はその成立を機に、ある状態  $E_1$  から別の状態  $E_2$  への変化を含意している事行である。であるから必然的に、図(13), (25)に於ける(B)の時点が越されると、つまり事行が成立すると、その後の(C)の部分に  $E_2$  が含意されるという構造になる。したがってこの種の事行は、(C)の部分に比重のかかるコンテキストでは、その潜在的に含意された  $E_2$  が浮き出てくることになり、最もPC<sub>parf</sub>の価値を生みやすい事行といえる。(2a)の [arriver (la lettre)], (16a)の [fermer (le concierge, la porte)] もいずれも transitionnel な事行である。他の例を次に挙

げる。

(27) a. Aujourd'hui, les mythes *sont entrés* dans le concret et les mots du vocabulaire socialiste flambent tout de bon. (Figaro, 14.7.1982)

b. Malheureusement, le cinéma *est devenu* un instrument pour le commerce courant : on fait du cinéma comme on vend ... n'importe quoi.

(Radioscopie III, p.14)

c. - Désirez-vous que je vous prête ce livre ?

- Non, merci, je l'*ai lu*.

(Le Bidois, 1968, p.443)

d. J'*ai construit* une maison comme vous voyez.

transitionnel な事行を表す動詞の中でも注目すべきは、sortir, partir, arriver, entrer, rentrer ... 等の一群の動詞である。主として momentané な事行を表し、「移動」に関わるものが多い。また助動詞も avoir より être をとるものが多いが必ずしもそうではなく、disparaître, quitter 等のように avoir をとるものもある。この種の動詞がPCのとき、PC<sub>parf</sub>が極めて生じやすい傾向がある。つまりこの種の動詞の表す事行は「結果の状態」の意を特に生じやすいということである。このことは、言語的にも確認できる。例えば、特別な操作無しで“depuis”（～から）との共起が容易であるという事実がある。“depuis”は、基準点より前のある一点から基準点までの期間を網羅的に対象とする表現であるから、もし(C)に於いて「状態」としての  $E_2$  が明確に含意されないならば、“depuis”とそのような事行との共起は難しくなるからである。

(28) a. Mon père *est rentré* depuis une semaine.

b. Depuis deux jours Daniel *est parti* ... (Les Thibault I, p. 609)

c. Mon frère, ..., *a disparu* depuis hier, ... (Ibid., p. 590)

- d. Jacques *a quitté* Paris depuis jeudi dernier. (Ibid., p. 676)

またこの種の動詞は, “en ce moment” (今, 目下) という「現在」をその持続においてとらえる表現とも共起しやすい。

- (29) a. Il est sorti en ce moment.  
b. Il est parti en ce moment.  
c. Il est arrivé en ce moment.

(29a)・(29b)は電話などで, “Max est là?” の返事に使えるし, (29c)には次のような会話が可能である。

- (30) (東京に住んでいるマックスは大韓航空でパリに行く)  
- Max est déjà parti ?  
- Oui, ce matin. Il est arrivé en ce moment à Séoul.

また同じ「移動」を表す動詞でも venir, aller は全く異なった性質を持っているようである。“depuis” との共起が困難であることからそれは窺える。

- (31) a. \*Max est venu depuis 3 jours.  
b. \*Daniel est allé à Lyon depuis un mois.

フランス人インフォーマントに向かって(31)の文を読み上げると, すかさず “depuis 3 jours”, “depuis un mois” を “il y a 3 jours”, “il y a un mois” で置き換えられてしまう。このことから, venir や aller はその見かけにも拘わらず, 「結果の状態」  $E_2$  を含意しない動詞らしいと考えられる。つまり上に挙げた sortir, arriver, partir ... 等は, 「結果」も含めて「運動」を表すが, venir や aller は「運動」のみを表している。ということは, venir や aller の表す事行は *procès non-transitionnel* ということである。non-transitionnel な事行の場合も, 原則として  $t_0$  での「結果の状態」を問題とすることは不可能ではない。このことは(9)に関して少し触れたし, 以下で再び触れることになる。

また transitionnel な事行でも non-momentané なものは, 文脈によってはその事行の「完成」(achèvement)を表さないことがあるというこ

とは3.1.で見た。しかしそれは(22)に見るように  $PC_{ant}$  の場合であって, はっきり  $t_0$  を指向する文脈・状況では, (27c), (27d)に見るように, 完成した事行の「結果の状態」を表す。

さて, non-transitionnel な事行に話を移そう。 $PC_{parf}$  の価値を持っていそうな例には次のようなものがある。

- (32) a. Maintenant, j'ai mangé assez. (= (9))  
b. Il est une heure ; nous avons déjeuné, Papa nous propose une sortie. (大橋, 1973-74, p.26)  
c. Tiens, il a plu ! (Vet, 1985, P.41)  
d. Elle a vécu. (= (10a))  
e. J'ai dit. (= (10b))

第Ⅱ節で見たように, non-transitionnel な事行の中には *procès à terme fixe* と *procès sans terme fixe* とがある。しかしいずれにせよ non-transitionnel な事行はその定義からいって, 自らの内に変化の後の新しい状態  $E_2$  を含意していない。こういった事行が  $PC$  という形に触れるとどうなるか。事行成立点(B)の導入により, *procès sans terme fixe* にも一応「終点」ができる。しかし transitionnel な事行と異なるのは, いくら  $t_0$  が指向されている文脈・状況でも, 事行は「成立」はしても, 何かが「完成」したということは決して表されないし, ましてや, (C)の部分を占める「結果の状態」も, 言語的には, 事行によって程度の差こそあれ, アプリオリには何も示されない。(32d)はかなり例外的なケースで, “vivre” (生きる) という動詞がその絶対的な意味で使用されていて, 「生」の後には必ず「死」が来るという言語外的知識によって裏打ちされている。したがって一種 transitionnel な様相を帯びているといえる。つまり Elle a vécu. ということは Elle se trouve dans l'état d'avoir vécu. ということなので, それはすなわち Elle est morte. (彼女は死んでしまった) という意味になる訳である<sup>22)</sup>。しかしな

22) 少し比喩的用法になるが, 次の例を本文執筆後見つけた。《Mon opinion, explique-t-il, c'est que les classifications (des fonctionnaires) établies à partir de la grille de Maurice Thorez de 1946 ont vécu.》Autrement dit, le statut de la fonction publique n'est plus adapté. (Libé, 12.8.1987)

がら、他の大部分の事行の場合はこれとは異なる。例えば、*J' ai mangé (déjeuné).* (= *Je me trouve dans l' état d' avoir mangé (déjeuné).*) ということは、アプリアリには何も含意しない。文脈・状況が意味構成に参加する訳であって、場合によって「出かける準備ができています」、「もうおなかが一杯だ」、等の意になる。このように non-transitionnel な事行の場合には、「結果の状態」の解釈が文脈・状況に大きく左右される。しかし、だからといって、このような PC に PC<sub>parf</sub> の価値を認めないというのはおかしいと我々は考える。

次の挿話も意味深い。出張していたフランス人が事務所に戻り、秘書が次のように言うのを聞いて、

(33) Monsieur Kawamoto est venu vous voir.

(川本, 1985 [1954], p.149)

「何故お待たせしておくのだ、早くお通しなさい。」と言うのは、“venir” という動詞は上でも見たように non-transitionnel な事行を表すにも拘わらず、その PC がまさに PC<sub>parf</sub> の価値を持っていることを示しているだろう。秘書が「川本さんがいらしたのは昨日のことです。」と言うと、そのフランス人は「それでは何故 *«Monsieur Kawamoto était venu.»* と言わないのだ。」と言ったそうである。(Ibid., loc. cit.)

ここで再度、これまでの観察を踏まえて *procès transitionnel / procès non-transitionnel* の区別を、その含意される状態 E<sub>2</sub> をめぐって考えてみたい。この区別からは、*procès à terme fixe / procès sans terme fixe* のそれが明快なのに比して、恣意的な印象を拭えない。そもそもその事行が成立したときにどのような E<sub>2</sub> が展開するのかということは、言語外的知識によるからである。上に見たように、“depuis” や “en ce moment” との共起が容易な transitionnel な事行は、言語的にその E<sub>2</sub> の存在が保証されているといえる。しかし我々の考えでは、大部分の事行に関しては、transitionnel / non-transitionnel の境目はそれほど明確ではなく、事行の含意する E<sub>2</sub> の明確さは、

「比較的」明確である/明確でないと言えないのではないかと思う。そしてその度合いによって、PC<sub>parf</sub> の価値も生まれやすかったり、生まれにくかったりするのではないだろうか。またそれも、動詞の時称や文脈・状況などによって流動的に変化するように思える。

さて次に、non-transitionnel な事行を表す動詞の中でも特殊な性質を持っている、一群の動詞の例を見よう。

(34) a. *J' ai gardé un très bon souvenir de toi.* (= (4))

b. ...*nous avons maintenu* Paris tel que les siècles nous l'ont légué.  
(Chirac) (Figaro, 13.7.1982)

c. *La fiole en cristal de roche, ..., est demeuré* intacte.  
(Plaque dans une église à Bruges)

d. *Marie-Louise est restée* une de nos meilleurs amis.

ここで明らかなのは、いずれの例においても問題になっているのは「過去の出来事」でも、「結果の状態」でもないということである。つまり図(18), (25)のいずれにも相当しない事行の形が示されているのである。ここでは、t<sub>0</sub> 以前のある時点から t<sub>0</sub> まで、ずっと事行そのものが続いている。Comrie (1976, pp. 56-61) は英語の完了形 (perfect) の型を四つ示している<sup>23)</sup> が、その中の “perfect of persistent situation” と似ている。次の例にそのタイプの perfect を見ることができる。

(35) a. *We've lived here for ten years.*

b. *I've been waiting for hours.*

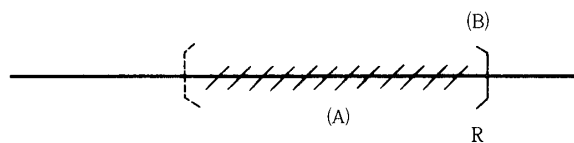
(Ibid., p.60)

フランス語では “depuis” などの副詞句の力を借りなくとも、例(34)に見られるように、garder, maintenir, demeurer, rester, 等ある一群のグループの動詞によってこの価値が実現される。すなわち「存続」、「保存」等の意義素を持った動詞である。そしてこの意味特性により、図(13)

23) 1. perfect of result, 2. experiential perfect, 3. perfect of persistent situation, 4. perfect of recent past.

の(B)点が  $R(=t_0)$  と重なってしまい、次の図に見られるように(C)の部分が消失してしまう。

(36)



斜線部分が話者が確認している事行部分である。これらの文は現在形にしても、全く同値ではないが、少なくとも述べられている事実は変わらない。次の例を(34)のそれと比較してみよう。

(37) a. Je garde un très bon souvenir de toi.

b. ...nous maintenons Paris tel que les siècles nous l'ont légué.

c. La fiole en cristal de roche, ..., demeure intacte.

d. Marie-Louise reste une de nos meilleurs amis.

では最後に  $PC_{parf}$  の中でも、基準点(R)が発話時点( $t_0$ )に一致しないケースを見てみよう。 $(R \neq t_0)$  このケースの例は  $PC_{ant}$  に比べて豊富である。

まず、R が  $t_0$  以降に位置する  $PC_{parf}$  である。 $(t_0 < R)$  この  $PC_{parf}$  は前未来形に近い価値を持つと考えられる。この場合何らかの形で、 $t_0$  以降の一時点が示されることが必要不可欠で、そこを基準として「結果の状態」の価値が実現される。

(38) a. J'ai bientôt fini. (=5))

b. Samedi prochain... je suis partie.  
(témoin oral à Paris, 18.5.1980)

c. Dans dix ans j'ai fait fortune.  
(Kahn cité in Imbs, *op. cit.*, p.103)

d. Tu n'oublies pas de me le rendre,  
quand tu l'as lu. (Imbs, *Ibid.*, p.102)

e. Dès que j'ai mangé, je suis à vous.  
(Klum, 1961, p.173 note 1)

次に、R の位置が  $t_0$  に対して定め難い、習慣・反復、普遍的真理、等の例に移ろう。この場合も、単に一回きりの特定の事行が問題と

なっているのではないという印が、何らかの形で必要不可欠である。

(39) Pierre est comme ça chaque fois qu'il a bu. (大橋, 1973-74, p.26)

“chaque fois que” が反復の解釈を促している。

(40) a. Un malheur est vite arrivé. (=6))

b. Un homme énergique n'a jamais eu peur en face du danger pressant.

(Maupassant cité in 朝倉, 1978 [1955], p.266)

c. Quiconque a beaucoup vu

Peut avoir beaucoup retenu.

(La Fontaine cité in Wagner-Pinchon, 1962, p.348)

d. Il est impossible d'aimer une seconde fois ce qu'on a cessé d'aimer.

(La Rochefoucauld cité in *Ibid.*, *loc. cit.*)

これらの例では、“un malheur”, “un homme énergique”, “quiconque”, “on” 等の総称(的)表現にその普遍的価値の出所がある。習慣・反復や普遍的価値の表現では、繰り返される R, あるいは特定のではなく一般的に想定される R を基準として、そこでの「結果の状態」を問題としている。こういったことが可能なのも PR の性質に由来するのである。

## おわりに

本稿では PC の曖昧性、別のことばで言えば PC の様々な価値がどこからくるのかを、その形にさかのぼって問い直した。はじめに、「以前の出来事」を表す価値を持つ PC à la valeur d'antériorité ( $PC_{ant}$ ) と、「結果の状態」を表す価値を持つ PC à la valeur de parfait ( $PC_{parf}$ ) という PC の二つの基本的価値を設定し、そこから事行のタイプ、基準点(R)・発話時点( $t_0$ )の関係、等の様々なファクターの絡み合いを通じて、PC の種々の基本的な用法が説明されることを見た。また我々は、 $PC_{ant}$  の価値はもとより  $PC_{parf}$  のそれも、transitionnel な事行のみ

ではなく、一般的に non-transitionnel に分類される事行によっても実現されることを主張した。

今回の考察を基にして、否定文・関係節・従属節・si 条件節内部の PC, および副詞句との意味生成の相互作用などを今後の課題としたい。また、〈être+p.p.〉の形は PC と「受動態」とに共通であるが、両者の共通点・相違点についてもじっくり考察してみようと思っている。

#### [例文の出典] (参考文献以外のもの)

Dic. GLLF = Grand Larousse de la langue française.

Figaro = *Le Figaro*, 13. 7. 1982, 14. 7. 1982.

Le Bidois = LE BIDOIS, G. et R. (1968) : *Syntaxe du français moderne*, Paris, A. et J. Picard et Cie.

Les Thibault = MARTIN DU GARD, R. (1955) : *Les Thibault*, Paris, Gallimard, Pléiade, t. I, II.

Libé = *Libération*, 12.8.1987.

Radioscopie = CHANCEL, J. : *Radioscopie I* (1970), *III* (1973), Paris, Robert Laffont.

#### [参考文献]

BENVENISTE, E. (1966) : *Problèmes de linguistique générale I & II*, Paris, Gallimard.

COMRIE, B. (1976) : *Aspect. An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*, Cambridge, Cambridge Univ. Press.

CULIOLI, A. (1980[1978]) : 《Valeurs aspectuelles et opérations énonciatives : l'aoristique》, in *La Notion d'aspect*, DAVID, J. & MARTIN, R. (eds.), Paris, Klincksieck, pp. 181-193.

DESCLÈS, J. -P. (1980[1978]) : 《Construction formelle de la catégorie grammaticale de l'aspect》 in *La Notion d'aspect*, pp. 195-237.

GUILLAUME, G. (1970[1929]) : *Temps et verbe*, Paris, Honoré Champion.

IMBS, P. (1960) : *L'Emploi des temps verbaux en français moderne-Essai de grammaire descriptive-*, Paris, Klincksieck.

KLUM, A. (1961) : *Verbe et adverbe*, Stockholm, Almqvist et Wiksell.

KOÏSHI, A. (1987) : *Détermination temporelle et aspectuelle dans des phrases contenant un adverbial de temps-quelques considérations sur "depuis"*, thèse du doctorat de 3ème cycle, Univ. de Paris VIII.

MARTIN, R. (1971) : *Temps et aspect. Essai sur l'emploi des temps narratifs en moyen français*, Paris, Klincksieck.

MEILLET, A. (1982[1921-1936]) : *Linguistique historique et linguistique générale*, Paris, Champion.

SARTRE, J.-P. (1975) : *Situations I*, Livre de poche, Paris, Grasset.

VET, C. (1980) : *Temps, aspect et adverbies de temps en français contemporain*, Genève, Droz.

—— (1985) : 《Univers de discours et univers d'énonciation : les temps du passé et du futur》, in *Langue française*, n° 67, septembre, pp. 33-58.

VIKNER, C. (1985) : 《L'aspect comme modificateur du mode d'action : à propos de la construction être + participe passé》, in *Langue française*, n° 67, septembre, pp. 95-113.

WAGNER, R.-L. - PINCHON, J. (1961) : *Grammaire du français classique et moderne*, Paris, Hachette.  
青木三郎 (1987) : 「現代仏語のアスペクト・テンス・モダリティー être en train de+inf. と現在形について」, 『フランス語学研究』, 第21号, pp.20-35.

朝倉季雄 (1978[1955]) : 『フランス文法事典』, 白水社.

大橋保夫 (1973-1974) : 「フランス語とはどういう言語か」, 『基礎フランス語』, 三修社, pp.1-29.

川本茂雄 (1985[1954]) : 「フランス語の複合時称」, 『言語の構造—フランス語そのほか—』, pp.149-162, 白水社.

佐藤正明 (1984) : 「《Présent dilaté dans le passé》の制約」, 『フランス語学研究』, 第18号, pp.20-36.

渡瀬嘉朗 (1985) : 「動詞の「時」と「相」」, 『フランス語学の諸問題』, 三修社, pp.38-49.